

## 修士論文要旨

### Impaired postural control following unanticipated single-leg landings in female soccer players with chronic ankle instability (慢性足関節不安定症を有する女性サッカー選手における予測できない片脚ジャンプ着地後の姿勢制御障害)

福祉健康科学専攻 健康医科学コース

学籍番号 24H1102

氏名 竹内 志貴

【キーワード】 Chronic ankle instability, Ankle sprain, Dynamic balance, Female athletes, Jump landing, Time-to-boundary

#### 要旨

本研究は、慢性足関節不安定症 (CAI) を有する女性サッカー選手を対象に、予測できない片脚着地後の姿勢制御の特徴を明らかにすることを目的とした。参加者は女性サッカー選手 18 人 (CAI 群 10 人, Control 群 8 人) であり、課題動作は 20cm の台からの予測できない片脚ジャンプ着地であり、着地後片脚立位保持、サイドカッティング、クロスカッティングのいずれかをランダムに実施した。片脚立位保持中における矢状面および前額面の下肢関節角度変化量、圧中心 (COP) 指標を算出した。COP 指標には総軌跡長、前後および内外側 (ML) 方向の平均速度、振幅、time-to-boundary (TTB) が含まれた。CAI 群は Control 群と比較して、前額面における中足部角度変化量 (0-5 秒:  $p = 0.043$ ; 5-20 秒:  $p = 0.017$ )、ML 成分の COP 総軌跡長 ( $p = 0.021$ )、COP 速度 ( $p = 0.002$ ) が有意に高値を示した。また、CAI 群では Control 群と比較して、ML 成分の平均 TTB は有意に低値を示した (0-5 秒:  $p = 0.018$ , 5-20 秒:  $p = 0.035$ )。CAI を有する女性サッカー選手は予測できないジャンプ着地後の片脚立位において感覚運動系の機能低下により姿勢制御能力が低下していた可能性が示

唆された。従来の COP 指標に加えて、TTB などの時空間分析を用いることにより、CAI を有する者の姿勢制御をより明確に評価できる可能性がある。

#### Abstract

This study investigated postural control following unanticipated single-leg landings in female soccer players with and without chronic ankle instability (CAI). Eighteen female soccer players, including 10 CAI and 8 healthy controls, participated in the study. They performed an unanticipated single-leg landing from a 20-cm box, followed by one of three randomly cued tasks: a 20-s single-leg stance, a 90° side-cutting, or a 90° cross-cutting. Angular variations of the lower limb joints in the frontal and sagittal planes, as well as center of pressure (COP) data including total trajectory length, mean velocity, range, and time-to-boundary (TTB) in both the medial-lateral (ML) and anterior-posterior (AP) directions were collected during the single-leg stance task. The CAI group demonstrated significantly greater midfoot angular variation (0-5 s:  $p = 0.043$ ; 5-20 s:  $p = 0.017$ ), a longer COP trajectory length ( $p = 0.021$ ), and higher COP ML velocity ( $p = 0.002$ ). The mean of TTB minima in the ML direction was also significantly lower in the CAI group (0-5 s:  $p = 0.018$ ; 5-20 s:  $p = 0.035$ ). These findings suggest that female soccer players with CAI demonstrated impaired postural control following unanticipated landings, likely due to sensorimotor deficits. Incorporating spatiotemporal measures such as TTB may improve postural control assessments in individuals with CAI.

## 修士論文要旨

Transcutaneous vagus nerve stimulation reduces total striatal GABA+ content, increases Glu content, and facilitates early-phase motor learning

経皮的迷走神経刺激は脳内神経伝達物質を変調し、

初期段階の運動学習を促進する

福祉健康科学専攻 健康医科学コース

学籍番号 24H1104

氏名 松村 佳奈

### 【キーワード】

経皮的迷走神経刺激, gamma-amino butyric acid, glutamate, 線条体, 背外側前頭前野, 運動学習

### 要旨

【背景】経皮的迷走神経刺激(transcutaneous vagus nerve stimulation, tVNS)は、神経可塑性を変調させる非侵襲的な手法として注目されている。先行研究では、脳内における  $\gamma$ -アミノ酪酸(gamma-amino butyric acid, GABA+)やグルタミン酸(glutamate, Glu)シグナルの変化がその作用に関与する可能性が示唆されているが、神経生理学的な実証データはいまだ十分でない。

【方法】本研究では、2つの独立した実験により、tVNSが健常成人に及ぼす神経生理学的および行動学的影響を検討した。実験1では、34名を対象に、左線条体(striatum, STR)、背外側前頭前野(dorsolateral prefrontal cortex, DLPFC)、感覚運動野(sensorimotor area, SM)のGABA+およびGluレベルを、刺激前後でプロトンを観測核とする核磁気共鳴分光法(magnetic resonance spectroscopy,  $^1\text{H-MRS}$ )により測定した。実験2では、27名を対象に、右手による力制御運動課題をtVNSの刺激前、刺激中(3回)、および刺激後の計5回実施した。

【結果】実験1では、tVNSにより左STRのGABA+が有意に低下し、左DLPFCのGluが有意に増加した( $p < 0.05$ )。実験2では、刺激開始10分後において、tVNS群はsham群と比較して目標線に対する誤差量が有意に減少し、力制御の正確性が向上した( $p < 0.05$ )。

【結論】tVNSはGABA+の低下およびGluの増加を誘導し、さらに初期の運動パフォーマンスを促進する可能性がある。本研究の結果は、tVNSが神経リハビリテーションや運動症状における運動パフォーマンス向上のための有望な非侵襲的介入となり得ることを示唆している。

## **Abstract**

**Objectives:** Transcutaneous vagus nerve stimulation (tVNS) has emerged as a promising non-invasive technique for modulating neuroplasticity. Previous studies have suggested that changes in regional brain gamma-amino butyric acid (GABA+) signaling contribute to these effects, but empirical neurophysiological evidence remains limited.

**Materials and Methods:** We investigated the neurophysiological and behavioral effects of tVNS (200- $\mu$ s pulses at 20 Hz, alternating 30 s ON–1 s OFF cycles, 30 min total duration) in healthy adults using two experimental paradigms. In Experiment 1, GABA+ and Glutamate (Glu) levels were measured in the left striatum (STR), dorsolateral prefrontal cortex (DLPFC), and sensorimotor cortex (SM) of 34 participants by proton magnetic resonance spectroscopy ( $^1$ H-MRS) before and after ipsilateral tVNS. In Experiment 2, 27 participants performed a right-hand force-control motor learning task before, during, and after tVNS.

**Results:** In Experiment 1, tVNS significantly reduced GABA+ levels in the left STR ( $p < 0.05$ ), increased Glu levels in DLPFC ( $p < 0.05$ ). In Experiment 2, the tVNS group exhibited a significant decrease in target-line tracking error compared with the sham group 10 minutes after stimulation onset, reflecting enhanced force control accuracy. ( $p < 0.05$ ).

**Conclusion:** tVNS (1) led to a reduction in striatal GABA+ levels and an increase in DLPFC Glu in healthy adults, and (2) facilitated early-phase motor learning. These findings may support the use of tVNS as a potential noninvasive intervention to enhance motor performance for neurorehabilitation and the treatment of motor disorders.

# 修士論文要旨

## 医療ソーシャルワーカーのストレスと ワーク・エンゲイジメントに関連する要因の研究

福祉健康科学専攻 福祉社会科学コース

学籍番号 23H1202

氏名 簗戸 勝弘

【キーワード】医療ソーシャルワーカー, 業務上のストレス, ワーク・エンゲイジメント, 医療ソーシャルワーカーの専門性, インタビュー調査

### 要旨

医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）は、「医療ソーシャルワーカー業務指針」に基づき、保健医療機関において、社会福祉学を基盤とする福祉的な視点を持つ唯一の専門職である。近年、診療報酬において退院援助といった役割が明確化され、多職種連携の要としても期待が高まっている。しかし一方で、診療報酬上の施設基準を達成するための退院支援がその業務の多くを占め、専門性と現実の業務との乖離や、役割の不明確さにより、MSWが高いストレスを抱えている実態も指摘されている。先行研究ではバーンアウトや離職といったネガティブな側面の研究が多く、MSWの働きがいや仕事への積極的な関与といったポジティブな側面に着目した研究は十分とはいえない。そこで本研究では、MSWのストレスとワーク・エンゲイジメントに関連する要因を検討することで、保健医療機関に勤務するMSWが専門性を発揮しながら、働きがいをもって就労できる職場環境構築への示唆を得ることを目的とした。

第1章では、文献および先行研究をもとにMSWの成り立ちから求められている役割や期待、そして、ストレスやワーク・エンゲイジメントについて言及した。ワーク・エンゲイジメントが高い従業員は、活力にあふれ、仕事に積極的に関与するという特徴を持ち（島津2010:1）、労働経済白書（厚生労働省2019）では、「働きがい」と同義とされている。診療報酬上に定められたことで、MSWの業務の中に退院支援に関する役割が大きな割合を占めるようになったが、その役割や専門性の曖昧さ等に起因するストレスも生じていた。

第2章では、インタビュー調査の方法、分析方法及び倫理的配慮について述べた。MSW8名を対象にGoogle Formsを用いたWebアンケートを実施した。アンケート調査には、職場のストレス要因を測定する「新職業性ストレス簡易調査票」および、仕事へのポジティブな態度である、ワーク・エンゲイジメントを測定する「ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメントスケール（UWES）短縮版」を使用した。続くインタビュー調査では、許可を得た7名に対して、先行研究を参考に作成したインタビュー項目を用いて、半構造化インタビューを行った。本研究では、大分大学福祉健康科学部倫理委員会における承認（承認番号：F240040）

に基づき実施した。

第3章では、実施した Google Forms によるアンケート調査の集計結果と、MSW 7名に対して行ったインタビュー調査の結果をもとに、質的研究による定性的コーディング（佐藤 2008）で分析を行った。アンケート調査の結果、仕事の資源（サポート要因）において顕著な傾向が見られた。部署レベルの資源（上司や同僚からの支援）については全国平均を上回っており、所属する連携室内での人間関係は良好であることが示された。しかし、事業場（組織全体）レベルの資源については、「公正な人事評価」や「キャリア形成」の得点が全国平均を大幅に下回っていた。また、ストレス要因については「情緒的な負担」や「役割葛藤」が強いことが示唆された。ワーク・エンゲイジメントスコア（平均 2.38）は医療・福祉関係専門職の全国平均（3.47）を下回る結果となった。

調査対象者に対して、インタビュー項目を用いて半構造化面接を行い分析した結果、【困難なケースにやりがいを感じる】、【組織運営に活かせる MSW の強みがある】、【MSW のキャリアアップ】、【MSW の専門性の曖昧さ】、【他職種との関わり】、【連携室の良好な関係性】の6カテゴリーを抽出した。

第4章では、分析結果をもとに MSW のストレスやワーク・エンゲイジメントについての考察を述べた。本研究からは、MSW の職場では概ね良好な人間関係があることがうかがえた。しかし一方で、仕事の資源（作業レベル）の「仕事の適正」、仕事の資源（事業場レベル）において、「経営層との信頼関係」「公正な人事評価」「キャリア形成」といった尺度が全国平均から大きく下回っていた。インタビュー調査においても、MSW への評価やキャリア形成に関する課題が抽出された。仕事の量や質などの負担、MSW の業務のストレスが、連携室といった部署単位での仕事の資源により、比較的良好に管理されているものの、組織からの仕事の資源が十分に付与されていないため、仕事の要求度-資源モデルの動機づけプロセスが十分に機能しておらず、ワーク・エンゲイジメントが低くなっている可能性が示唆された。

今後 MSW の職場環境を改善し、MSW のワーク・エンゲイジメントにつながる要因を高めるためには、専門性の確立や組織でのキャリアアップへの道筋を明示する必要がある。医療において唯一の福祉専門職としての組織への働きかけが、現職、また将来の MSW にとってのワーク・エンゲイジメント向上につながると考えられる。

第5章では、本研究の結論及び限界について述べた。MSW は部署内の良好な人間関係という資源を活用して、困難事例に対応している一方で、所属組織からの評価やキャリアパスの提示に課題を抱えていることが明らかとなった。MSW の専門性や組織における有用性については、MSW 自らが発信していく必要がある。仕事の資源が豊富なほど、ワーク・エンゲイジメントが高まる（島津 2022:48）。MSW のスキル向上に加え、適切なフィードバックの獲得や、所属組織内での「地位報酬」や「公正な評価」を得るためのマネジメント的視点を持つことが、ワーク・エンゲイジメントの向上に向けた職場環境改善のための鍵となることが示唆された。

本研究では調査対象者数も少なく、知見の一般化に至っていない。今後は、調査対象者数を増やし、病院機能や組織形態による職場環境の差異や、経験年数に応じた支援策の検討が求められる。また名称独占資格ゆえの報酬体系の不安定さといった構造的要因や、MSW が専門性を能動的に発信し、組織運営などに影響を及ぼす過程についても、量的・質的な両面から包括的に検証していくことが必要である。

## 修士論文要旨

### 社会的養護経験者の視点から考える理想の養育者像に関する研究

－養育者との比較検討に基づく構成要素の検討－

福祉健康科学専攻 福祉社会科学コース

学籍番号 23H1203

氏名 三田尻 陽子

【キーワード】社会的養護, 児童養護施設, 社会的養護経験者, 養育者, 信頼関係

#### 要旨

本研究は、社会的養護のもとで育った経験をもつ社会的養護経験者と、児童養護施設職員（以下「養育者」と表記）の双方の語りをもとに、「理想の養育者像」の構成要素を明らかにすることを目的とした。調査は半構造化インタビューを実施、得られた語りを質的に分析し、上位・中位カテゴリーを抽出した。

結果、社会的養護経験者の語りより、養育者の専門的な支援技法そのものよりも、「言われなくても気持ちに気づいてくれる」「日常の関わりの中で一緒に生活していると感じられる」といった、人としての存在を基盤とした関係性が求められていることが示された。養育者が子どもの思いや揺れを、否定せずに受け止め、関係を切らさずに関わり続けることが、安心感や信頼感の形成につながっていた。また、こうした関係性を基盤に、子ども自身が悩み、考え、選択し、立て直していく過程を共に経験することが、社会的養護経験者の語りの中で重要なことが示された。

一方、養育者の語りからは、子どもの状態や特性を見立て、危険行為への介入や言語化による説明、強みと課題を見極めた関わりなど、専門性に基づいた養育実践が多く語られた。同時に、日常生活を共にする中で情緒的に関わり、見捨てられない関係を保障しようとする姿勢も語られており、養育者の実践は「判断行為としての関わり」と「存在としての関わり」の両側面を併せもつものであった。

両者の比較検討から、「理想の養育者像」には大きな齟齬はみられない一方で、社会的養護経験者は「存在を尊重した関わり（Being 要素的）」をより多く求めていたことに対し、養育者は「存在を尊重した関わり（Being 要素的）」を重視したうえの、自立を見据えた「判断行為としての関わり（Doing 要素）」を意識した支援を理想とすることが示された。すなわち「理想の養育者像」とは、専門知識と技術を背景に持ちながらも、それを前面に出すのではなく、日常生活を共に営む中で関係性の質を積み重ね、子どもと合意形成を重ねながら関わりを調整していく存在であることが示された。

## 修士論文要旨

# メンタルヘルスの不調によって病気休暇を取得した教師が復帰に至るまでの心理的プロセスと復帰後の状況に関する研究 －Bernier の回復の段階モデルを参考にした分析－

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース

学籍番号 24h1301

氏名 木藤 あゆみ

【キーワード】 教師, メンタルヘルス不調, Bernier の回復の段階モデル, 自己理解, 複線径路・等至性モデル

### 要旨

#### 問題・目的

文部科学省（2025）によると、精神疾患による教師の1か月以上の病気休暇取得者数は高止まりしており、教師の心身の疲弊は深刻な状態にあることが推察される。先行研究では、Bernier のバーンアウトからの回復の段階モデルを踏まえつつ、日本の教員の長期の定年までの雇用制度、日本人の人間関係、性格などを考慮した心理的プロセスの検討が必要とされている（佐野，2014）。そこで、本研究では、病気休暇を取得した教師を対象に、Bernier のバーンアウトからの回復の段階モデルを参考にして、職場復帰に至るまでの心理的プロセスを明らかにすることを目的とする。加えて、疾患への知識や自身の性格理解が再発予防に果たす役割を明らかにすることを目的とする。

#### 方法

面接協力者は、縁故法によって募り、メンタルヘルスの不調による病気休暇取得者で、現在は1年以上継続して職場復帰している教師2名であった。調査時期は2025年7～8月で、90分の半構造化面接を1回実施した。フェイスシートにて基本属性、現在の勤務形態、病気休暇取得時の状況について記入してもらい、面接内容は、①働いていて疲弊を感じた出来事や状況、身体や行動への影響、②休職に至るまでの経緯（ライフイベントを含む）、③仕事から距離をとった際の気持ち、④心身をリラックスできるようになった時期・方法、⑤元々楽しみとしていたことが楽しめるようになった時期、⑥疾患や自分の性格傾向を考えるようになった時期・休職前との変化、⑦復職を考え始めた時期、⑧復職後の気持ち、⑨復職後の再発予防への意識、⑩休職前にほしかったサポート、⑪休職中や復職に向けて利用した機関・受けたサポート、サポートが役に立ったか、⑫休職中や復職に向けて周囲の人から得たサポート、得た際の気持ち、⑬休職中にほしかったサポート、⑭

復職後に得られているサポートとした。分析方法は、複線径路・等至性モデルを用いた。

## 結果

複線径路・等至性モデルを用いた分析の結果、54のラベルと18の社会的ガイド、7の社会的方向づけが生成された。Bernierの回復の段階モデルと類似した心理的プロセスを日本の教師も辿ることが明らかとなった。

## 考察

### 1. Bernierの回復の段階モデルを参考にした病気休暇取得から復帰までの心理的プロセス

Bernierのモデルを参考に分析した結果、①身体の不調を感じる、②病気休暇に入る、③ゆっくり養生する・実家で休養する、④価値観を問い直す、⑤病気をきっかけに新しい価値観を得る、⑥自分が楽しいと思えるようにする、無理のない範囲で頑張る・次にその学年を持つ決心という、Bernierの6段階に相当する心理的プロセスがみられた。その一方で、専門家によるサポートが価値観を問い直す段階を支えていることに特徴が見られた。加えて、自己理解の深まりと新しい価値観の再構築が、同職種への継続的な職場復帰と再発予防に重要な役割を果たしていることが示唆された。

### 2. 教師のストレス要因について

協力者2名はそれぞれ異なるストレス要因を抱えていた。A先生は長時間勤務に加え、育児や職場の人間関係などのストレス要因が複雑に絡み合っていた。一方、B先生は児童生徒や保護者との関係悪化が主なストレス要因であったが、周囲のサポートにより早期に休暇取得に至り、状態の悪化を防ぐことができたことと推察された。ただし、校内で本音や愚痴を共有できる相手がいなかったことは、両者に共通してストレスを増大させていた。

### 3. 自己理解の深まりと再発予防

協力者2名とも自身の性格傾向の理解の深まりが、継続した職場復帰に繋がっている一因と推察された。また、心理検査やカウンセリング、心理療法は性格傾向を知るきっかけとなっており、さらに、医師やカウンセラーなどの専門家とのやりとりが自己理解の深まりに繋がったことが示唆された。加えて、自己理解が深まったこと、メンタルヘルスの不調を繰り返したくないという思いが、これまでとは異なる新しい働き方や教師としての在り方の獲得に繋がり、再発予防にもなっていると推察された。

### 4. 教師のメンタルヘルスの不調の予防・サポートの検討

教師のメンタルヘルスの不調の予防やサポートにおいて、病気休暇取得前、病気休暇中、職場復帰後の時期に応じた適切なサポートが必要であり、サポートのなかでも、同僚・管理職からのサポートと専門家によるサポートが強い影響力を持つことが明らかになった。特に、専門家によるサポートでは、心理検査やカウンセリングを通じて、自身の性格傾向や状態について知り、自己理解を深めるきっかけとなっただけでなく、自己否定につながる危険のある④価値観を問い直す段階を支える可能性が示唆された。

## 今後の課題

協力者が少ないため、年齢や性別など幅を広げて検討することが課題として残った。

## 修士論文要旨

### インターネット依存とマインドフルネスの関連性

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース

学籍番号 24H1302

氏名 久原 歩武

【キーワード】 インターネット依存, マインドフルネス, FFMQ, 評価しないこと, 気づきの伴う行為

#### 要旨

##### 問題・目的

現代社会においてインターネットは生活基盤の一部として定着しているが、利用者が使用を制御できず有害事象が生じてもやめられない「インターネット依存」が問題視されている。アジアの大学生の 24.3%が該当することが示されており (Duc et al., 2024), その予防・改善に向けた心理教育的支援が求められている。その技法の一つとして、価値判断することなく注意を向ける「マインドフルネス」が注目されており、先行研究ではインターネット依存とマインドフルネスの間に負の相関があることが示されている。しかしながら、これまでの研究ではマインドフルネスのどの構成要素がインターネット依存に具体的に關与しているか、特に青年期後期 (大学生・大学院生) における詳細な検討は十分ではない。Calvete et al. (2017) は青年期前期を対象にその関連を検討しているが、発達段階の異なる大学生においても同様の傾向が見られるかは明らかではない。そこで本研究では、大学生・大学院生を対象に、Five Facet Mindfulness Questionnaire (FFMQ) を用いてマインドフルネスの 5 つの因子とインターネット依存傾向 (IAT) との関連性を検討する。具体的には、どの因子が依存傾向の低減に寄与するかを明らかにすることで、インターネット依存に特化した、より効果的かつ効率的なマインドフルネストレーニングの開発に寄与することを目的とする。

##### 方法

調査協力者及び手続き：大学生および大学院生 134 名 (男性 61 名, 女性 72 名, 無回答 1 名; 平均年齢 19.6 歳 $\pm$ 1.7 歳) を対象とし、Google フォームによる Web 調査を行った。

調査内容：①属性：性別, 年齢, 1 日のインターネット平均利用時間。②マインドフルネス：日本語版 Five Facet Mindfulness Questionnaire (Sugiura et al., 2012) を用いた。「観察」8 項目, 「反応しないこと」7 項目, 「評価しないこと」8 項目, 「描写」8 項目, 「気づきの伴う行為」8 項目の 5 因子 39 項目, 5 件法。③インターネット依存：Internet Addiction Test 日本語版 (独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター) を用いた。20 項目, 5 件法。分析方法：記述統計量として、使用する尺度の平均値, 標準偏差,  $\alpha$  係数を算出した。その後、マインドフルネスの 5 因子とインターネット依存傾向との相関分析を行った後、マインドフルネスの 5 因子を説明変数, インターネット依存傾向を目的変数とした重回帰分析を行った。

##### 結果・考察

記述統計量の結果から、全ての因子において.66以上の値を示し、信頼性が認められた。相関分析の結果、マインドフルネスの総合得点に加え、「評価しないこと」および「気づきの伴う行為」がインターネット依存傾向と有意な負の相関を示した。さらに、重回帰分析を行った結果、モデル全体は有意であり ( $R^2 = .18$ , 調整済み  $R^2 = .15$ ,  $F(5, 128) = 5.76$ ,  $p < .001$ )、「気づきの伴う行為」のみが有意な負の予測因子として抽出された ( $\beta = -.39$ ,  $t = -4.75$ ,  $p < .001$ )。「評価しないこと」や「観察」など他の因子は有意な予測因子とはならなかった。このことから、マインドフルネスの要素の中でも特に、現在の行為に意図的に注意を向ける「気づきの伴う行為」を高めることが、衝動的なインターネット使用に対する自己制御機能を向上させ、依存の抑制に寄与すると考えられる。本研究の結果は、高いドロップアウト率を防ぐために全体の負荷を下げつつも、変容に必要な「形式的な練習の構造」を維持し、かつインターネット利用という日常行為に直結したインフォーマルな実践を組み込んだ、短縮型・統合型のプログラムを開発・検証することであると考えられる。

### 今後の課題

本研究の結果を踏まえ、今後の課題として2つ挙げられる。1つ目は、縦断的調査及び介入研究を行うことである。今後は、同一の対象者を一定期間追跡する縦断的調査や、実際に開発したマインドフルネスプログラムを用いた介入研究を行うことで、縦断的な変化や変容のプロセス、因果の方向性をより詳細に検証する必要がある。2つ目は、対象年齢や依存群・非依存群等、調査対象をより絞った研究を行うことである。今後は、対象年齢を絞った詳細な検討や、スクリーニングテスト等を用いて依存群と非依存群を明確に区分した上での群間比較、あるいは医療機関における臨床群を対象とした調査を行い、本研究の知見の妥当性を検証することが求められる。

引用文献：省略。

## 修士論文要旨

# 青年期における肯定的/否定的自己への注目が 随伴性自尊感情と本来感に与える影響 —自己注目（自己内省・自己反芻）を媒介して—

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース

学籍番号 K24H1303

氏名 鈴木 千智

【キーワード】 青年期, 自己内省, 自己反芻, 随伴性自尊感情, 本来感

### 要旨

#### 【問題・目的】

自己に注目を向ける自己注目は、不適応的/適応的観点から自己反芻と自己内省に分けられる (Tapnell&Campbell, 1999)。不適応的な自己注目である自己反芻は、自己の否定的な側面に注目する「否定的自己への注目」と関連すること、適応的な自己注目である自己内省は、自己の肯定的な側面に注目する「肯定的自己への注目」と「否定的自己への注目」によって深化する可能性が示唆されている (熊田・及川, 2015)。しかし自己の否定的な側面の直視は、相応の不安や苦痛を生じさせ、自己から注意を逸らせる注意転化を引き起こす (Duval&Wicklund, 1972) ために、自己の否定的な側面の直視は困難なものとなる。また、肯定的な自己側面のみに注目する状態は、自己理解の一面性ゆえに自己像が脆弱であり、自尊感情が不安定な可能性があると考えられる。そこで、自尊感情の揺れ動きやすさを捉える概念として、外的評価によって影響を受けやすく不安定な性質をもつとされる「随伴性自尊感情」(Kernis, 2003) を取り上げる。また、その対置概念として、自尊感情の高低が外的な基準上での判断に縛られず、個人が自分らしくあると安定して感じられる程度である「本来感」(伊藤・小玉, 2006) に着目する。さらに伊藤・小玉 (2006) では、本来感が青年期の自己形成を支える安定的な自尊感情を捉えている一方で、随伴性自尊感情は青年期における不安定な自尊感情を反映している可能性を示唆している。以上のことから、自己の肯定的側面にのみ注目することによって高められるのは、不安定な自尊感情である随伴性自尊感情である一方、自己の否定的側面からも目を逸らさず肯定的側面とともに自己内省することによって高められるのは、安定した自尊感情である本来感であることが推測されるが、このようなことを検討した研究は見当たらない。

本研究では、肯定的自己への注目と否定的自己への注目が、自己内省と自己反芻および、随伴性自尊感情と本来感にどのような影響を与えるか検討することを目的とした。

## 【方法】

大分大学に所属する学生 229 名を分析対象として、令和 7 年 6 月から 7 月に Google フォームを用いた web 調査を実施した。調査内容は、①フェイスシート(年齢・性別)、②自己側面注目尺度(熊田・及川, 2015)、③Rumination-Reflection Questionnaire (RRQ) 日本語版(高野・丹野, 2008)、④随伴性自尊感情尺度(伊藤・小玉, 2006)、⑤本来感尺度(伊藤・小玉, 2005) の 5 つである。

## 【結果】

「肯定的自己への注目」「否定的自己への注目」を独立変数、「自己内省」「自己反芻」「随伴性自尊感情」「本来感」をそれぞれ従属変数として二要因分散分析を行った。その結果、「自己内省」と「本来感」については、「肯定的自己への注目」と「否定的自己への注目」の主効果が有意、交互作用は非有意となった。「自己反芻」に対しては「否定的自己への注目」の主効果のみ認められた。さらに、「随伴性自尊感情」については「否定的自己への注目」の主効果と交互作用が有意であり、「否定的自己への注目」が低い場合には、「肯定的自己への注目」が高いと増幅する可能性が明らかとなったが、それは「肯定自己への注目」と「否定的自己への注目」が共に高い場合と同程度であることが示された。共分散構造分析では、仮説にて想定していたものの非有意であったパスを消去するとともに、相関分析と先行研究を踏まえて新たなパスを追加することで最終モデルを作成した ( $X^2=24.164$ ,  $df=5$ ,  $p=.000$ ,  $GFI=.968$ ,  $CFI=.937$ ,  $RMSEA=.129$ )。最終モデルでは、「肯定的自己への注目」と「否定的自己への注目」から正のパスを受けた「自己内省」が「本来感」を向上させること、「否定的自己への注目」から正のパスを受けた「自己反芻」が「随伴性自尊感情」を高め「本来感」を低下させること、「自己内省」が「自己反芻」に移行する可能性があることが明らかとなった。

## 【考察】

二要因分散分析からは、「肯定的自己への注目」は、「本来感」を高めるうえで重要な要素であり、必ずしも自尊感情の不安定さを引き起こすとは限らないことが明らかになった。また共分散構造分析より、「否定的自己への注目」のみでは「自己反芻」が促進されることで「随伴性自尊感情」は高まり、「本来感」が低下してしまう一方で、「肯定的自己への注目」と同様に「否定的自己への注目」によって「自己内省」が促進されれば、「本来感」が向上することが明らかになった。さらに、「否定的自己への注目」は両義的であり、「自己内省」を促進することで「本来感」が向上する可能性もあれば、「自己反芻」を高めることで「随伴性自尊感情」が増幅する危険性も示された。したがって、否定的な自己側面の扱い方が大切であり、自己の否定的な部分や失敗に対して優しさや思いやりを持って接する「セルフコンパッション」が、「自己内省」へと繋がり、「本来感」を向上させることに寄与していくと推察された。

## 修士論文要旨

# 熊本地震被災者を対象にした心的外傷後成長がもたらす ライフコース選択への影響 ー青年と成人の語りの比較からー

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース  
学籍番号 24H1304  
氏名 西元 響

【キーワード】 心的外傷後成長, ライフコース選択, 熊本地震, 青年期, 成人期

### 要旨

#### 問題・目的

本研究は、熊本地震被災者の被災体験に着目し、心的外傷後成長（PTG）が発達段階や当時の立場に応じてどのように形成され、ライフコース選択と結びつくかを明らかにすることを目的とする。PTG は、破壊的な出来事を経験した後に生じる肯定的心理的变化であり、苦痛の存在を前提に、他者との相互作用や情緒的サポート、体験の意味づけが形成に寄与する（Tedeschi & Calhoun, 1996; 宅, 2016）。青年期では自己理解や進路選択に、成人期では生活基盤や家族・地域への責任に影響を及ぼすことが想定される（佐々木ら, 2020; 笠田, 2013）。さらに、ライフコース選択の観点からは、災害体験が人生の進路や居住地、人間関係などの具体的選択に反映されることが示唆されている（鈴木ら, 2023）。本研究では、被災者の語りを通して PTG のプロセスを質的に検討し、発達段階や立場に応じた支援の在り方を検討する基礎的知見の提供を目指す。

#### 方法

本研究は、熊本地震を被災時中学生または成人で経験した者を対象に、縁故法で 9 名を抽出し半構造化面接を実施した。調査前に日本語版外傷後成長尺度（Taku et al., 2007）と IES-R（飛鳥井, 2004）で心理的負担を評価し、リスクの高い者は除外した。面接では、被災体験、心理的变化、ライフコース選択に関する語りを聴取し、IC レコーダーで記録した。分析には M-GTA を用い、逐語録から共通する語りを抽出し、概念化・カテゴリー化することで、発達段階や立場に応じた PTG のプロセスを明らかにした。

#### 結果

分析の結果、34 カテゴリー、113 サブカテゴリーが抽出された。さらに、熊本地震による被災体験に関して、18 カテゴリー、74 サブカテゴリー、熊本地震による PTG に関し

て、9 カテゴリー、39 サブカテゴリー、熊本地震によるライフコース選択に関して、5 カテゴリー、13 サブカテゴリー、その他2 カテゴリーが抽出された。被災者は、被害状況や避難経験の大小にかかわらず、生活の制約や無力感を経験しつつ、家族や仲間、支援者との関係を通じて情緒的支えを得ていた。これらの体験は命の大切さや日常の価値への気づき、共感性の高まりなどのPTGを促し、人生観や価値観の変容をもたらした。こうした内的変容は、将来の在り方や役割意識に影響を与え、青年期は比較的明確な将来像に基づく具体的選択、成人期は現実的制約や役割を踏まえた持続的な選択として表れた。また、性別により土地への残留や社会貢献への志向などの傾向がみられた。

## 考察

本研究では、熊本地震被災者のPTGの様相を、発達段階や当時の役割、ライフコース選択との関連から検討した。その結果、被災者は被害の大小に関わらず、命や日常生活の価値の再認識、他者への共感性の高まり、人助けや防災意識など多面的なPTGを経験していた。PTG形成には、ボランティア活動や他者との交流、被災体験の語り・共有が重要であり、苦痛の緩和や体験の意味づけ、多世代・地域コミュニティの強化に寄与していた。また、青年期は周囲との関係や支援経験を通じて将来の選択や自己効力感の向上が促され、成人期は当時担った役割や社会的責任に基づき被災体験の継承や生活上の具体的判断に影響していた。さらに、地域やコミュニティとの関わり、ナラティブ共有は個人のPTGだけでなく地域全体の回復にも寄与することが示唆され、青年期・成人期それぞれの発達段階に応じた支援の重要性が確認された。性差や地域特性への配慮も含めた包括的支援がPTG促進の鍵となると考えられる。

## まとめと今後の課題

本研究は、熊本地震被災者の語りを通じて、被災体験後の心理的過程とPTGの様相を検討した。被災体験は時間の経過とともに再解釈され、命や日常の価値の再認識、他者への共感性の高まり、人助けや防災行動など、多面的なPTGとして表れていた。語りや共有は心理的苦痛の緩和や意味づけを促すと同時に、コミュニティとのつながりや社会的支援の認識を強化した。さらに、PTGやライフコース選択は発達段階や当時の役割によって異なり、青年期では自己有能感の形成と将来選択、成人期では役割の継承や社会的使命感として現れた。一方で、本研究には対象者募集方法や面接時間、性差・地域差の分析不足といった限界がある。今後は、性差や地域差に着目した比較研究や、進路選択など人生の転換期に焦点を当てた支援の検討を通じ、青年期・成人期のPTG形成過程やライフコース選択への影響をより明確化し、災害後の心理的成長や社会参加を促進する実践的知見の獲得が期待される。

## 修士論文要旨

### 文化的自己観と Well-being との関連性についての検討

ーソーシャルサポート、世代差、他世代交流を踏まえてー

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース

学籍番号 24H1305

氏名 福田 ゆう

【キーワード】 文化的自己観, Well-being, 良好な関係性, ソーシャルサポート, 他世代

#### 要旨

##### 問題・目的

文化心理学研究では、文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991)は、個々人の振る舞いや他者との関係の持ち方に影響する要因と見做されてきた(北山, 1994; 北山・唐沢, 1995; Markus & Kitayama, 1991)。従来、文化的自己観は、自己を他者とは独立的なものとして捉える相互独立的自己観と、自己を周囲との関係性から定義する相互協調的自己観の二側面から構成されるものと考えられ(Markus & Kitayama, 1991), これらと Well-being との関連についても検討がなされてきた。しかし、殊に相互協調性の効果については実証研究が少なく、関連性の理由についても明確には検討されていないのが現状である。

そのような中、近年では、文化的自己観を4つに細分化した理論(Hashimoto & Yamagishi, 2016)に基づいた研究も進んでおり、調和追求・自己表現・独自志向は Well-being と関連し、その中でも調和追求は他者との親密さと正の関連があること (山崎・堀田, 2022)が示されている。良好な関係性はソーシャルサポート取得に繋がること(内田他, 2012), 及びソーシャルサポートが個人の自由選択の感覚を予測する(中里・藤本, 2022 ; Tanaka et al., 2023)とされている。また、独立性(独自志向, 自己表現)と調和追求は個人が自由に振る舞えていると考える程度(自由選択の感覚)を予測するとされており (Nakazato et al., 2016), 自由選択の感覚は Well-being の高まりに寄与する(Inglehart, 2008)ことが示されている。よって、文化的自己観の調和追求・自己表現・独自志向はこれらの過程を通して Well-being と関連するものと考えられる。一方、福沢他(2021)や福沢他(2022)は、高齢者では自己表現は他者との良質な相互作用につながることを示し、文化的自己観に基づく他者との関係性が世代によって異なる可能性が考えられる。また、若者・高齢者において他世代との交流は肯定的な側面があることも報告されている(田淵・三浦, 2014)。

これらを踏まえ、本研究では、文化的自己観が親密な人間関係の構築を介してソーシャルサポート取得を導き、最終的に Well-being につながる過程を検討する。また、この過程が世代によって異なるのか、さらに交流相手世代及び交流頻度によって調整されるのかを検討することを目的とする。

## 方法

令和7年10月に大分大学の大学生と調査会社クロス・マーケティングにアンケートモニターとして登録に登録している社会人・専業主婦(主夫), 及び65歳~74歳(以下:高齢者)の方を対象に調査を行い, 回答に不備のあった方や回答時間が極端に短い方の回答を除外し, 460名(大学生:140名, 社会人:158名, 高齢者:162名)を分析対象とした。調査では①人生満足度尺度(Diener et al.,1985)の日本語版(大石, 2009), ②GHQ精神健康調査票の短縮版(GHQ-12)(中川・大坊, 1985), ③文化的自己観尺度(Hashimoto & Yamagishi, 2016), ④親密性尺度(遠藤, 1997), ⑤ソーシャルサポート尺度(中村・浦, 2000), ⑥自由選択の感覚(中里他, 2014), ⑦交流世代・交流頻度, ⑧基本属性(大学生:年齢, 性別, 所属学部, 社会人・高齢者:年齢, 性別, 居住地域(都道府県), 職業, 収入, 教育歴, 婚姻状態)について回答を求めた。なお, 社会人・高齢者については, 全国から調査対象者を収集した。

## 結果

回答者世代全体を対象とする構造方程式モデリングを実施し, 文化的自己観が他者との良好な関係性を介してソーシャルサポート取得を導き Well-being に至る仮説を検討したところ, 文化的自己観の「独自志向」と「他者との良好な関係性」因子との関連は非有意であり, モデルの適合度も低かった。そのため, 非有意なパスを除去するとともに, 有意な効果がみられた変数間へのパスを追加しモデルを推定した。最終的に, 調和追求及び自己表現が他者との良好な関係性やソーシャルサポート, 自由選択の感覚を介して Well-being に影響するモデル(適合度:  $\chi^2(9) = 74.688, p < .001, CFI = .93, RMSEA = .13, SRMR = .06$ )を採択した。

## 考察

結果から, 調和追求及び自己表現は, 他者との良好な関係性やソーシャルサポート, 自由選択の感覚を介して Well-being に繋がること示唆された。調和追求は他者との関係を大切に, 相手と良好な関係性を築くことや, 他者からの支援を得られることにつながり, 安心感やつながりをもつことで自由に行動できる感覚や Well-being が高まる可能性がある。また, 自己表現は自身の感情や考えを表現し, 他者との関係性を深めることで, 支えを得ることや自由に行動できることにつながり, Well-being が高まると考えられる。

さらに, 本研究では, 上記過程の世代差を検討するために媒介調整分析を行った。その結果, いずれの世代でも「調和追求」及び「自己表現」が上記過程に至る流れが確認された。ただし, 自己表現や親密性に関する複数のパスにおいて世代による調整効果があることも示された。加えて, 交流世代の調整効果を世代別で検討した結果, それぞれの世代で交流相手世代によってパスの効果が左右されることが明らかとなった。ただし, 左右される交流世代については, それぞれの世代によって異なることが示された。

## 修士論文要旨

### ユーモアの意図をもった言動の受け取り方に関する要因

－自己受容とユーモアスタイルに着目して－

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース

学籍番号 24H1306

氏名 村川 響子

【キーワード】 ユーモア, 自己受容, 言動の受け取り方, 大学生, 質問紙調査

#### 要旨

##### 問題と目的

ユーモアは他者とのコミュニケーションにおいてよく用いられ、笑いや楽しさを生じさせる一方で、話し手の意図とは異なり受け手の怒りや不快感を引き起こす場合もある。本研究では塚脇ら（2011）が述べた、面白さや可笑しさを喚起させる刺激としてのユーモアを扱う。ユーモアが受け手にネガティブに体験される例として、いじりやからかい、いじめなどが挙げられるが、これらは状況や関係性によって言動の受け取り方が変動する曖昧さを持ち、明確に分類することは容易ではない。このように話し手の意図が受け手にそのまま受け取られるか否かには、個人によって異なる何らかの要因が関連していると考えられる。ユーモアは時に、受け手にとって不快となり得る内容を対象とするが、「自己をあるがままに受け容れること」（宮沢，1979）とされる自己受容は、その内容が不快なテーマであってもネガティブな意味づけをせずに受け取れることを可能にするかもしれない。また、受け手自身がどのようなユーモアスタイルを使用する傾向にあるのか、という視点もユーモアの受け取りに影響を与える可能性がある。

以上より、本研究では話し手のユーモアの意図をもった言動が受け手にどのような影響を与えるか、自己受容とユーモアスタイルを用いて、大学生を対象に検討する。仮説は次の2つである。仮説1：自己受容性が高く、自虐的ユーモアスタイルを使用する人は、他者からの言動を楽しく感じる傾向がある。仮説2：自己受容性が低く、攻撃的ユーモアスタイルを使用する人は、他者からの言動を不快に感じる傾向がある。

## 方法

2025年11月に大分大学に所属する大学生を対象に Google フォームを用いた Web 調査を実施した。回答に不備のあった方を除外し、99名を分析対象とした。調査内容は、①基本情報（学年、性別）②ユーモアの意図をもった言動の仮想場面（5場面、6件法）③宮沢（1980）の自己受容性測定スケール④村木・山口（2015）の日本人向けユーモアスタイル質問紙の5つである。

## 結果

階層的重回帰分析の結果、いずれの仮想場面においても自己受容とユーモアスタイルの交互作用は認められなかった。しかし、仮想場面②では、自虐的ユーモアについて交互作用項投入前後のいずれのモデルにおいても、有意な結果および有意傾向を示す結果が一貫して生じた。

## 考察

仮説は支持されなかったが、結果から以下のことが考察された。

1.自己受容：本研究では、自己受容は仮想場面の受け取り方には直接作用しなかった。つまり、自己受容は個人のユーモアスタイルの傾向とは関連するが、ユーモアの意図をもった言動の受け取りには直接結びつかないことが示された。これは、自己受容という広い概念よりも、ユーモアスタイルといった狭い概念の方が仮想場面という限定的な状況に影響しやすいためと考えられる。また、受け取り方は相手との関係性やトピックなどの要因によって変動すると推察される。

2.ユーモア：本研究では、ユーモアスタイルは自己受容と相互に影響しながら作用するのではなく、ユーモアの意図をもつ言動の受け取り方に単独で作用することが示唆された。ただし、この作用は一様ではなく、ユーモアが用いられる場面の特徴に依存する可能性がある。特に仮想場面②は、身体的特徴を取り上げた場面で平均値が最も低く、不快に受け取られていたことから、元来個人が持っている特徴で修正が容易でない要素を対象としたユーモアは不快感を喚起しやすいと考えられる。

また、相関分析において仮想場面②と自虐的ユーモアに正の相関がみられ、該当場面を楽しく感じるほど自虐的ユーモアを使用する傾向があると示された。自虐的ユーモアは不快刺激を自己防衛として処理する機能を果たした可能性がある。さらに、本研究では自己受容と自虐的ユーモアに負の相関がみられたが、これは自己受容の高い者が自虐的ユーモアを用いるとした塚脇ら（2009）とは異なる結果であった。本研究では具体的な対人場面を仮想させたため、周囲を楽しませる意図よりも傷つきを回避する意図が強く反映された可能性がある。以上より、自虐的ユーモアは場面によって自己防衛として働く可能性が示された。

## 修士論文要旨

# 思春期身体発育の心理的受容度に影響を及ぼす要因 —大学生における摂食障害傾向との関連に着目して—

福祉健康科学専攻 臨床心理学コース

学籍番号 24h1307

氏名 渡邊 亜海

【キーワード】身体発育, 心理的受容度, 身体満足度, 自尊感情, 摂食障害傾向, 質問紙調査

要旨

### 問題・目的

摂食障害傾向の実態を調査した加藤ら(2013)は、中学生から高校生にかけて摂食障害予備軍が増加することを指摘し、その背景には、思春期で第二性徴を迎えた女子が経験する体型の変化があると述べている。月経をはじめとする思春期の身体変化と摂食障害の関連については、様々な研究で指摘されてきており、摂食障害の発症には社会文化的要因が密接に関連している(日本摂食障害学会, 2012; 加藤ら, 2013) のことも踏まえると、自身の思春期的身体変化をめぐる周囲の重要な他者との間で交わした対人経験が摂食障害の発症に関わっていることが推測される

上長(2006)は、思春期の身体発育に対する心理的受容度に影響を与える要因として、「思春期の身体発育にまつわるイベント」(周囲から自身の身体に関して何か言われた等の対人経験。以下、身体イベント)に注目して、こうした身体イベントを経験したことがある群とない群とで思春期の身体発育の心理的受容度に差があるかを検討し、自分の自然な身体発育が周囲に受け入れられるような身体イベントの経験は、思春期の身体発育に対する自身の心理的受容度を高めるが、思春期の自然な身体発育と相容れないような身体イベントの経験は、思春期の身体発育に対する自身の心理的受容度を低下させてしまうことを指摘した。しかし、上長(2006)の身体イベントの項目では、自分の思春期的な身体発育の受け止め方に影響を及ぼしていると考えられる「初潮」や「初潮・生理をめぐる体調不良等」をめぐる周囲の他者とのやり取り等については全く触れられていない。

そこで、本研究では、「思春期的身体発育に対する心理的受容度」に影響を及ぼす要因として、「初潮」「初潮・生理をめぐる体調不良等」を含めた思春期的身体発育に関する他者との経験を取り上げ、これが心理的受容度とどのように関連しており、結果として身体満足度や摂食障害傾向にどのように影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とする。

### 方法

2025年11月から2025年12月に大分大学に所属する女子学生を対象に調査を行った。

質問紙による調査で得られた 172 名のデータを分析の対象とした。調査内容は、①回答者基本属性（年齢）、②「思春期的身体発育をめぐる他者との経験」についての質問項目（上長（2006）の身体イベントに関する質問項目に予備調査から作成した独自の項目を加えたもの）、③思春期の身体発育の発現に対する心理的受容度（上長、2007）、④自尊感情尺度（桜井、2000）、⑤身体満足度尺度（上長、2007）、⑥摂食障害症状評価尺度（SRSED）（永田、1990）の6つである。

## 結果と考察

*t* 検定の結果から、「生理をめぐるネガティブな身体イベント」や「異性友人による身体特徴指摘イベント」を経験した者は、「初潮・生理をめぐる身体不調に対する心理的受容度」が有意に低かった。このことから、生理痛で学校や体育を休んだり見学したりする際に周囲から否定的なことを言われたり責められたりした経験や、異性から女性的な身体特徴を指摘された経験は、自身の思春期的身体変化に対する恥や嫌悪感へと繋がり、生理による身体的苦痛をより受け入れがたくしている可能性があると思われた。また、「同性の友人から体重増加について肯定・否定含めて何らかの言及をなされる」という経験自体が、自身の「皮下脂肪に対する嫌悪感」を増幅させることにつながっていた。上長（2007）は、身体像のモデルとなる同性友人との身体イベントは、自己の身体に起こる変化を否定的な受け止め方にさせる可能性があるとは指摘しているが、今回の結果はそれを裏付けるものである。

また、共分散構造分析の結果、「身体満足度」に影響を及ぼしていた「思春期の身体変化の心理的受容度」は、「胸のふくらみに対する心理的受容度」と「皮下脂肪がついてきたことに対する心理的受容度」の2つだけであった。このことから、思春期青年期の女性にとって、さまざまある思春期の身体変化の中でも、対人関係において目に見える女性らしさを象徴するような身体変化に対する心理的な受容度が、自身の身体満足度に大きな影響を与えている可能性が示唆された。

さらに、「自尊感情」に対しては、「思春期の身体変化の心理的受容度」からの有意なパスは認められず、「胸のふくらみに対する心理的受容度」ならびに「皮下脂肪がついてきたことに対する心理的受容度」から正の影響を受けた「身体満足度」からのみ有意な正のパスが見られた。これらのことから、思春期青年期の女性の「自尊感情」は、思春期の身体変化の心理的受容度から直接影響を受けているわけではなく、「身体満足度」といったより高次の認知過程による影響を受けている可能性が考えられた。

最後に、「摂食障害症状」に対しては、「身体満足度」からも「自尊感情」からも有意なパスが認められず、唯一「皮下脂肪がついてきたことに対する心理的受容度」からのみ有意なパスが認められた。思春期の身体変化のうち、「皮下脂肪がついてくること」に関しては、「身体満足度」といった高次の認知過程を媒介することなく、皮下脂肪がついてきたことそのものをどのように受け止めたかという感覚的な評価（率直に嬉しいか／嫌か）が、直接、摂食障害症状に影響を与えている可能性が示唆された。

## 修士論文要旨

### 原風景イメージ想起時の体験様式についての検討

—日常風景との比較を通して—

福祉健康科学専攻臨床心理学コース

学籍番号 24H1308

氏名 渡邊 万穂

【キーワード】 原風景, イメージ体験, 体験様式, 想起, 回想法

#### 要旨

##### 問題と目的

原風景とは、「幼いころ過ごした風景が思い起こされるといった、過去の経験にもとづいた、忘れがたく自身にとって重要な風景のこと」とされる（呉・園田，2006）。原風景は、強い自我関与、安らぎの場といった意味や機能を持つとされる（井上，1995）。臨床心理学においては、原風景を想起・回想することの有用性が指摘されている。樋口（2007）は、池田（2001）による不安神経症患者の事例研究を原風景の視点から考察し、原風景を想起することが心の故郷として機能し、安らぎと活力を与え、非常に苦しい状況にいるクライアントを支えてきたと述べる。

原風景の想起・回想の研究においてはその効果のみならず、体験様式という観点から検討されている。体験様式は「どのようにイメージが体験されているか」のことであり、イメージの体験様式は「イメージ拒否・イメージ拘束」、「イメージ観察」、「イメージ直面」、「イメージ体験」、「イメージ受容」の5つの段階があり（田嶋，1992）、イメージ療法のプロセスにおいて一定の法則で変化するとした（田嶋，1987）。

原風景においてもイメージの体験について検討されている。原風景の語り場面での原風景想起を捉えることで、個々人のリアリティのある体験として原風景がどのように表れるのかを明らかにした研究（呉，2000）や、原風景の心像体験が自由記述に及ぼす影響を検討した研究（小泉，2015）が挙げられる。以上のように、原風景はイメージ体験様式という観点からも様々な研究が行われているが、他イメージとの比較を通して体験様式について検討した研究は見当たらない。

そこで本研究では、原風景を想起する条件と日常的な風景を想起する条件を設定し、体験様式の違いについて比較し、原風景イメージの体験様式の特徴について検討する。

**方法** 調査協力者と研究分担者の1対1の個別形式で行い、原風景および日頃の風景の想起（原風景想起条件／日常風景想起条件）と、Google フォームによる質問紙への回答、想起された風景の自由記述を求めた。その後、自由記述の回答を半構造面接にて詳細に尋

ねた。質問紙は調査前に日本版 GHQ30 への回答を求めた。(1) 一時的気分尺度 (TMS) (徳田, 2011) (2) 印象評定尺度 (小泉, 2015) (3) イメージ体験様式: イメージの鮮明性 (古川, 2018), イメージの集中度 (古川, 2018), 身体感覚の有無 (古川, 2018), 内的視点イメージ (杉浦, 1996 ; 小泉, 2015), 外的視点イメージ (杉浦, 1996 ; 小泉, 2015), イメージ体験過程尺度 (IEPS) (松本, 2008) についても回答を求めた。

**結果** (1) 一時的気分尺度 TMS (徳田, 2011) については, 両条件において因子 1 (緊張) が有意に低下し, 原風景想起条件においては因子 4 (混乱), 因子 5 (疲労) も有意に低下した。条件間のイメージ想起前後の気分変化量については, 原風景想起条件が日常風景想起条件よりも因子 6 (活気) の変化量が有意に高いことが示された。(2) 印象評定尺度については, 原風景想起条件が日常風景想起条件よりも因子 I (感情性) が有意に高く, 日常風景想起条件が原風景想起条件よりも因子 III (鮮明性) が有意に高いことが示された。(3) 体験様式については, どの尺度においても有意差が見られなかった。

### 考察

(1) イメージ想起前後の気分状態の比較については, 徳田 (2009) や古川 (2018) と同様, イメージ想起により気分状態が変化し, 特に原風景想起条件でより多くの因子で得点の低下が見られた。条件間でイメージ想起前後の気分変化量を比較すると, 活気において, 原風景想起条件における気分変化量が日常風景想起条件よりも大きいことが明らかとなった。ポスト-プレ得点がプラスの値となっており, 原風景の想起前後で活気が高まっている傾向を読み取ることができる。この傾向は, 古川・五位塚 (2021) と同様と結果となった。想起内容や語りとして, 好きなものや楽しかったことがよく見られ, 気持ちが明るくなったことや心が高揚することが語られた。これらによって, 活気が高まる傾向が見られた可能性が示唆される。

(2) イメージの印象評定尺度の比較については, 原風景想起条件の方が日常風景想起条件よりも感情性が高く, 日常風景想起条件の方が原風景想起条件よりも鮮明性が高いことが明らかとなった。原風景想起条件では山や田んぼ, 海といった自然が広がっている風景や, 町全体が見えるほどの高台の墓地が想起されていた。それゆえ, 原風景イメージは日常風景イメージと比較して大きくて広いものと捉えられ, 大きいや広いといった項目がある感情性において高くなったのではないかと推測される。鮮明性については, 最近の風景や, 毎日見ている風景, よく見ている風景が見られており, 日常風景想起条件の方が明確にはっきりと思い出されたのではないかと考えられる。

(3) イメージの体験様式の比較については, 本研究では, 原風景想起条件と日常風景想起条件間のイメージの鮮明性の比較, イメージの集中度の比較, 身体感覚の有無の比較, 観察的心像・経験的心像の比較, イメージの体験過程レベルの比較では, 有意差が見られなかった。想起内容やインタビュー調査より, 原風景想起においてはイメージの深まりや広がり, 感情や五感の特徴, 井上 (1995) が述べた強い自我関与, 安らぎの場といった意味や機能が見られることが示唆された。